京都「被爆二世・三世の会」会報

京都市中京区壬生仙念町３０-２
ラボール京都５階
京都原水爆被災者懇談会気付
ＴＥＬ075-811-3203
ＦＡＸ075-811-3213
ＨＰ　http://aogiri2-3.jp

Kyoto Association of 2nd & 3rd Generation *Hibakusha*（Atomic Bomb Survivors）

１０月２４日国連創立記念日　～３０日国連軍縮週間　四条河原町で街頭署名宣伝行動
英訳付きの横断幕　これで外国人旅行者にもしっかりと訴えられるようになりました！

福島取材報告№.１　「ＡＬＰＳ処理汚染水」の海洋放出が新たな実害をもたらしている
米重節男　２
増田正昭さん　個展散歩　４
乙訓平和の集い／Ｓｉｌｅｎｔ　Ｆａｌｌｏｕｔ上映会での感想　７
会員から会員へ@みなさんからのお便り紹介　８
本・ＤＶＤ・映画・番組の紹介と交流　９
「福島からの手紙　―　１２年後の原発災害」
「３・１１大津波の対策を邪魔した男たち」
「増補版　軍都廣島」
SCRAPBOOK　「核実験被害に補償を　米ニューメキシコ州」（赤旗）
「平和首長会議国内総会閉幕」（毎日）
編集後記　１２
２０２３年１１行事カレンダー　１３

福島取材報告№.1
「ALPS 処理汚染水」の海洋放出が新たな実害をもたらしている

米重節男（向日市）

１０月１５日から１７日に日本機関紙協会京滋地本が派遣した、福島の共同取材団に参加してきました。この組織は、２０１１年の震災以降２０１９年まで、定期的に福島取材団を派遣してきました。コロナ禍の間は派遣できなかったので、４年ぶりの取材団です。私は、２０１４年と２０１６年の取材団に参加してきました。また２０１８年にも、いわき市から南相馬市の範囲を訪問し、被災者支援活動に参加しましたので、福島を訪れるのは５年ぶりです。

共同取材団行動の概要

今回は、「原発をなくす向日市民の会」が福島の被災地を訪れるのを目的に、会報の編集委員２人で共同取材団に参加しました。今回の取材団は計６人で、いわき市在住の丹治杉江さんの案内で、いわき市・広野町・楢葉町・富岡町・大熊町・双葉町・浪江町・南相馬市・相馬市・福島市と広範囲にレンタカーで回りました。

取材先は、①「ＡＬＰＳ処理汚染水差止訴訟原告団事務局」（いわき市）②宝鏡寺と「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」（楢葉町）③生業訴訟団（相馬市）④中間貯蔵工事情報センターと施設・貯蔵地区内（大熊町）⑤県北農民連事務局（福島市）で説明を受け、話を聞きました。視察したのは次の箇所です。

①津波に襲われた塩屋崎灯台と薄崎浜の「いわき震災伝承みらい館」（無料）で津波被災体験者の講話を聞く
②汚染水海洋放出に一番近い楢葉町大浜海水浴場と、隣接する広野火力発電所を見る
③ＪビレッジとＪＲの専用駅
④東電福島第２原発門前で追い返される
⑤大熊町役場と周辺に新たに作られた復興拠点の公営住宅、町立義務挙育学校「学び舎ゆめの森」、原発関連業務で働く人用の住宅群を見学、同住宅用の「大熊食堂」で昼食
⑥大熊町の帰還困難区域の状況とＪＲ大野駅を視察
⑦旧双葉町役場と新たに作られたＪＲ双葉駅とその前に移転新築の双葉町役場を視察
⑧「福島県東日本大震災・原子力災害伝承館」（有料・双葉町）の見学
⑨国営追悼・祈念公園予定地の展望台
⑩震災遺構浪江町立請戸小学校（有料）
⑪大熊町の老人介護支援センター「サンライト」敷地内の展望台から福島第一原発を遠望
⑫松川事件の列車転覆現地を視察
⑬浪江町の帰還困難区域を通り、現状を確認。

処理汚染水を海洋放出の差止訴訟を聞く

いわき市で「ＡＬＰＳ処理汚染水放出差止訴訟」事務局を訪問しました。広田次男弁護士、原告団共同代表の一人の鈴木茂男さん（いわき市労働組合総連合事務局長）、訴訟原告団事務局の丹治杉江さん、「生業を返せ、地域を返せ！福島原発訴訟」原告団世話人の遠藤正芳さんも参加して、汚染水放出問題についての地元の様子、訴訟団の目的を説明してもらいました。

東電を相手にした７件の訴訟の内、３件は判決が確定して終わっています。それを受けて、いわき市民訴訟団は東電社長が現地でお詫びをするよう求め、７月に謝罪セレモニーをしたのに、その翌月には、海洋放出をしました。平気でウソをついています。このようなことをいつまでも続けさせることは、民主主義・社会正義にもとることで、許されないと考え、差止訴訟を起こしました。

訴訟団は原告集めをする中で、提訴予告の記者会見を８月２２日に開いたのですが、翌日に海洋放出が実行されました。

法廷では、「ＡＬＰＳ処理汚染水」と主張して「虚構とデマで成り立っている原発は、民主主義・社会正義に反している。海を守ろう」を中心軸にして裁判を闘い、科学論争はしない方針です。福島ではかつて松川事件で、日本中の世論の力で

無罪を勝ち取った経験があります。その闘いに学び、広く国民世論に訴えて行くと広田弁護士から説明がありました。

原告、「①福島第一原発付近の太平洋沿岸部に住む、福島・茨城・宮城・岩手・千葉・東京の人②この１都５県から避難中の人③１３５００円の費用を負担。」を条件にして、第一次訴訟団は１５１人が９月８日に提訴しました。引き続き、原告を募っています。１１月９日までは、第一次訴訟団とすることができるので、広く呼びかけています。原告になれない人は、「ＡＬＰＳ処理汚染水差止訴訟を支援する会」を作るので、会員を募集していると話がありました。。

広田弁護士(右端)から差止裁判の説明を聞く

訴訟の理由

海洋放出差止訴訟で示されている主な提訴理由を見ると、原発事故がもたらした計り知れない被害を端的に述べています。今回１２年後の被災地を見て、聞いた話と重なると思いました。その提訴理由を原告募集の案内から引用紹介します。

（１）政府と東京電力は２０１５年に福島県漁連に対し、「関係者の理解なしにはいかなる処分も行わない」と文書で約束しているが、福島県漁連、全漁連は現在に至るまで海洋放出反対の姿勢を表明しており、福島県内の多数の自治体が海洋放出反対、または陸上保管等を求める意見書を提出している。海洋放出の強行は一方的に国が国民との約束を反故にする行為であり、民主主義の否定である。事故の責任者である政府と東京電力が、国民の声を無視することは許されない。

（２）世界中の原発からトリチウムを含む排水が放出されているのは事実だが、原発事故により発生した汚染水の排出は世界にもない。

① ＡＬＰＳ処理水は燃料デブリに触れており、通常の排水とは異なる。ヨウ素１２９、ストロンチウム９０、ルテニウム１０６などトリチウム以外の核種が残存していることを東京電力も認めている。海水で希釈すれば安心などという非科学的な理屈は通用しない。

② トリチウムについては、体内組織と有機結合して長期間残存したり、生態系を通じた生物濃縮が起きる危険性が指摘されている。体内で被ばくし続ける内部被ばくの影響を、単純な線量に置き換えるのは適切ではない。

（３）海洋放出の期間について、政府は３０年程度と述べている。しかし、実際には廃炉作業は遅れ続け、燃料デブリの取り出しの見込みは２０２３年現在も立っていない。「広域遮水壁」「集水井戸」などの、地下水流入を止めるための対策もほとんど検討されておらず、廃炉終了まで、事実上半永久的に放出が続けられる可能性が高い。また、海洋放出以外にも、大型タンク貯留やモルタル固化などの代替案が技術者、研究者から提出されているが、既に実績もあるこれらの代替案について、政府・東京電力はまともに議論を行っていない。

（４）政府は「風評被害」対策として８００億円の基金を設け、水産物の売り上げ減少に対しては東京電力が賠償を行うとしているが、原発事故の被害とは、放射線被ばく以外にも、地元産業の崩壊、コミュニティの分断、精神疾患の増大など多面的であり、その全てが金銭では取り返しのつかない実害である。これらを「風評」にすり替えることは被害の矮小化であると同時に、被害を訴える声を「風評加害」として抑圧し、言論の自由を奪うものである。

われわれは原告にはなれないが、裁判を支援す

る会員になることはできます。広く多くの人が支援会員になって裁判を闘うことが必要だと感じました。

汚染水問題の根本は、流入地下水を如何にして減らすのかが課題です。いまの流入量と放出量は、ほぼ同じであるのが実態です。今のままでは、永遠に放出が続きます。

帰還困難区域で廃墟となった施設や廃屋を見ると、２０１６年にチェルノブイリ原発の周辺でみた景色がよみがえりました。政府はなんだかんだと言いながら、結局は時間と金をかけて、なし崩し的にあきらめさせて、住民は住まない、戻れない土地にしていると感じました。

（つづく）

増田正昭さん　個展散歩

■今年の個展

９月２４日（日）～３０日(土)、被爆者の肖像画、６回目の個展を開催しました。今回は個展のタイトルを「世代を超えて被ばくに挑む二世たち」としました。

これまでに描いてきた肖像画は、被爆者が３０人、昨年からは被爆２世も描き始めてそちらが６人、合わせて３６人になっています。今年はさらに７人描いて、個展で展示することができています。

■最初の肖像画は濱恭子さん

被爆者の肖像画を描き始めたのは２０１８年です。前の年の２０１７年の「被爆者をはげますつどい」に参加して、そこに参加されていた濱恭子さん（当時９２歳）を描いたのが最初でした。濱さんは大阪大空襲に遭い、広島に疎開して広島で原爆に遭い、奇跡的に助かった人でした。その話が、フランス語を研究されている娘さんを介してフランスの有名な作曲家に伝わり、感動されて、交響曲にされ、コンサートも開かれたということでした。

■亡くなられた人の写真から描く肖像画

肖像画に描いた３０人の被爆者全員のことをここで話すわけにはいきませんが、一人だけ上げるとすれば、国府幸代さん（「二世・三世の会」の会員）のお母さんのことがあります。国府さんから肖像画を是非描いて欲しいと求められた人です。お母さんは小学生の頃から西陣の機織りに携わり、８０歳台まで生涯機織りで生計を支えられてきた人でした。その働いている場面を是非ということで描くことになりました。国府さんのお母さんは一昨年描いたのですが、もう亡くなられている人を描いたのは２人目でした。お母さんの写真を見ながら描いた肖像画です。

被爆した手は完全に手袋で覆われていました。顔も相当きつい状態になっていたのだと思いますが、戦後の治療で大分良くはなっていたのだと思います。国府さん一家は広島駅で被爆されているのですね。あの日呉から広島経由で京都まで帰る予定で、広島駅で乗り継ぎを待っている時に被爆しています。原爆が投下されたその日、奇跡的に一本だけ汽車が走って、それに乗れたのですぐに京都まで帰れたのだと言っていました。

■本当の表情が生まれてから描き始める

肖像画を描く時には少なくとも２時間はその人と向き合ってお話しをし、長い人だと５時間話

したこともありますが、それではじめて描き始めていきます。何故２時間なのかというと、２時間は会話しないと本当のその人の心が分からない、本当の表情が出てこないのです。私から見て表情が見えてくるようにならなければならない。デッサンしてはじめて定着する。デッサンできないと定着できません。デッサンというのは本当に大切なのです。

■「黒い雨」被害者の救済の広がりを願って

広島「黒い雨」裁判の高東さんの肖像画も描かせていただきました。高東さんの講演されている会場にまで行って、その場でデッサンさせてもらって描きました。昨年８月に被爆者健康手帳の交付を受けられた浦上博子さんも「黒い雨」の被害を受けられた方です。「黒い雨」被害者は広島だけに住んでおられるのではない、全国どこでも、京都でも手帳はとれる、そのことを広く知らせる機会にもなればと思って、浦上さんの肖像画も描きました。

■留学生の気概と優しさ　―　２枚の絵に

２年前の個展会場に「南方特別留学生サイド・オマールさんを語り継ぐ会」の早川先生が来られて、オマールさんの写真を見せて肖像画を描いて欲しいと求められました。サイド・オマールさんはマレーシアからの特別留学生で広島大学で勉強していて、原爆に遭い、終戦後国に変える途中の京都で亡くなった人です。留学生といっても特別留学生は、当時の日本の大東亜共栄圏構想の一部で、実質人質のような人たちで、全国に２０５人いたそうです。オマールさんは原爆にあって自らも大火傷を負いながら、日本人の被爆者の人たちとの救援に尽くした凄い人だったのですね。国を代表して日本に留学しているような気概と、無茶苦茶優しさのあったところと、肖像画は２枚描こうと思いました。一枚は実物以上の大きさのサイズのものに。実際に会ったこともない人を本当に描けるのかどうか、描いた絵が本当に似ているのかどうか確認してもらえる人もいなくて、そういう不安とたたかいながらの制作でもありました。

■父が連れて行ってくれた原爆ドーム

今回の個展のメインの作品は私の父親とのツーショットの絵です。私の父親はあまり家庭的な人ではなく、家に帰ってこないことも多かったような人でした。私と父親とが一緒に写っているような写真は一枚もなかったのです。ところが母親が一人ずーっと大切に持っていた写真があって、それがこの父親と私とが二人並んでいる絵の、もとになっている写真です。私が中学１年生、１３歳、父親が４０歳代になった頃です。私自身がこんな写真のあることは知りませんでした。母親が亡くなる前に遺産相続の準備の時に私の兄に渡していたのです。

この写真は、１９６５年頃、広島の原爆ドームを存続させるか取り壊すか、議論されている最中のもので、この年の１１月に保存することが決定しています。それから保存工事が始まっています。実はこのツーショットの写真は今は原爆ドームの立ち入られない場所で撮られています。どうして、親父が私をここに連れてきて一緒に写真を撮ったのか・・・・・。「原爆ドームが無くなるかもしれん。今のうちに息子と一緒にドームの前で写

真を撮っておこう」と思ったのではないか、と推測しているのです。

■母の道程を辿る

母親は２０１０年３月に８９歳で亡くなりました。その３～４年前の写真から母親の肖像画は描きました。これも私の兄貴が持っていた写真で、亡くなる前の母のイメージがはっきりと出ている写真でした。母親からは被爆の体験はまったく聞かされていませんでした。そこで、被爆者健康手帳の交付を申請する際に「被爆の状況」を書くようになっていて、申請すればそれを開示してもらえると聞いたので、広島市に申請して手にすることができました。原爆が投下された時、母は１５歳の女学生で呉に疎開していて、後から広島市内に入って入市被爆していました。実家は広島市の大手町、ほぼ爆心地地です。何もかも跡形もなくなっていたそうです。私は母が入市して歩いた道程をその通りに歩いて、実家のあったはずのあたりも見て回り、比治山の麓にあるお墓にも墓参してきました。その上で絵は描きました。

■父との出会い直し

父親も被爆体験について一言も語らずに亡くなっています。母親と同様に被爆者健康手帳交付申請書類の開示請求を行い、父の場合それに加えて軍人だったので軍歴も調べました。父親は１９４５年の２月に召集され、いよいよ本土決戦だということで１万人ほどの本土沿岸に配備される特別な部隊に配置されていたようです。終戦の日の８月１５日から２日後、北九州のどこかから広島に帰り、家族や親族の安否を訪ねて入市しています。父親の実家は北天満町というところ、これも爆心地に近いところですが、祖父や家族を探していました。原爆投下後２週間も経たない中で広島の地獄の惨状を見て、父は何を思ったのか･･･。父親の被爆の体験を知ることで、父を一人の人間として見直すことになりました。父親のその時の立場に立って父の肖像画を描く、なかなかしんどいことでしたけど、私と父親との出会い直しの機会になりました。

■父と母を広島に連れて行きます

父も母も描きました。やっぱりこの絵は広島へ持っていかなあかんなと思っています。来年２月１３日（火）～１８日（日）、今度は広島で個展をやります。もともとは広島にいた家族もみんなバラバラになって、私もじっくりと広島に帰えることは今までなかった。父も、母も、広島に連れて帰ろうと思っています。広島の個展の会場は京都のここのギャラリーの３倍の広さはあるので、今まで描いてきた作品は出来る限り全部持ち込んで展示したいと思っています。ギャラリートークも計画しています。同窓会や、平和のための広島県人会のみなさんも含めて、広く案内して個展を催したいと考えています。

広島個展会場予定のギャラリーG

１０月１日(日)乙訓平和の集いでの
放射線を浴びたX年後Ⅲ *Silent Fallout* 上映会での感想

●つらい内容の映像でした。核兵器はもちろん、原発も本当にいらない。実験も、どの国の政府も国民には知らせないないんですネ。誰のための核なんだろう。人の体も自然も世界中が汚染されているという話にショックを受けました。

●放射性物質の広がり方が、皆が思う以上に広範囲に渡っていること。当時のアメリカ政府等は、その可能性を知っていたであろうに、地域住民に何も知らせず、また調査も行っていない。(行っていて隠しているのかも）のはひどすぎる。母親たちの調査活動により、明らかになったように。このことが政府を動かしたのはすごいが、地下実験だったら良いという問題ではない。映画の中で、ここは言葉足らずだったのでは。福島原発事故の影響もきちんと調査させることが重要と感じた。そおためにも、このような映画を通して多くの人に知らせることが大切と思いました。

●とてもいい作品を見れて心に深く残りました。１人でも多くの人が見るべきだと思います。実行委員会の方々ありがとうございます。

●ありがとうございました。私は８０才以上の年齢になり、とても小さい頃のことを思い出されました。やはり何でも理解できるように脳を活性化するため、良かったです。今日は勉強になりました。

●アメリカの行った原水爆実験の被害の実態は膨大なものだったと感じていましたが、乳歯の測定にかかわる大きな努力により、それがはっきりしました。ガンの出現の大きくなっている事。放射性降下物の測定から、証拠になるものと感じます。福島に汚染水を放出しているこの状況の中で、大変よい取組みをしてくださってありがとうございました。

●衝撃的な内容で、大変感動しました。是非、アメリカで全世界に拡げて欲しいと思います。

●大変にそして大事な映画を初めて見せていただきました。ぜひ、これからも上映し、多くの人が見られるように、機会を設定くださるよう、宜しくお願い致します。

●とても考えさせられる、いい映画でした。核兵器の恐ろしさを実感しました。ぜひこの映画を日本中に、世界中に広め、多くの人に見てもらえるようにしたいです。

●アメリカ全土でこんな事があった事、また６０年たった今も続いている事、知る事、伝える事の大事さを感じた。今日は来て良かったと思いました。観るまではむつかしく、深刻でしんどい映画と思っていたら、見入ってしまい、わかりやすかったです。

●内容は良くても、音が大きすぎて在席しているのがつらかったです。一考を。

会員から会員へ ✿ みなさんからのお便り紹介

他地域の２世・３世の方からいただいたお便りも紹介いたします。

■リハビリがんばって必ず会いにいきます！

村上ひろみ（北区）

今年の猛暑、酷暑の中でも“戦争も核兵器もなくし、平和な世界を!”“大軍拡をすすめる岸田政権ＮＯ！”とふんばられた皆さん、本当にお疲れ様です！！

私は思わぬ病気で倒れてしまい、リハビリ入院含めて３ヶ月も入院していました。皆さんからの励ましメッセージのおかげで、気持ちを元気に前向きにすることができました。本当にありがとうございました！

退院はできましたが、まだまだ体力、筋力が落ちてしまっていて普通に動くことができません。３ヶ月の入院で落ちた体力を回復するには半年くらいかかるのかなぁと思うようになりました。もう少しリハビリも、自主トレもして、脳神経外科、術後の検査も受けて、ふんばっていこうと思っています。

皆さんに早くお会いしたい！と思いますが、焦らず、諦めずにいこうと思います。待っていてくださいねぇ。よろしくお願いします。

■東京「おりづるの子」講演と交流のつどいに招かれて

平　信行（南区）

１０月２２日(日)、「おりづるの子」（東京被爆二世の会）の講演と交流のつどいに招かれて、京都「被爆二世・三世の会」の１０年間の経験と今後の展望についてお話ししてきました。久しぶりの東京でした。参加者は２２人。

講演の後、質疑応答の時間もしっかりとられていました。参加者自らの体験も明らかにしながら、被爆二世の健康障害をもっと広く深く明らかにしていく必要性が話し合われました。また広島・長崎の原爆被害者だけでなくあらゆる核被害者と連帯・共同していく運動の必要性も語り合われました。私も学ぶことの多い充実した３時間でした。

■わが家の台所に新しい精米器が登場❗

井坂博文（北区）

１５年以上にわたってわが家のご飯炊きを支えてくれていた精米器がとうとう壊れた。産直で玄米を取り寄せ、その都度必要な分を精米して炊飯器で炊いているので、精米器は必需品。

娘たちに話したら、「いつも精米して白米をもらっているし、プレゼントするわ」と嬉しい申し出。

前の精米器と違って、コメの銘柄によって精米の仕方が違うらしいが、そんなことまで気にせず、七分づきにして機嫌良く美味しく食べている。

本・DVD・映画・番組・その他の紹介と交流

■福島からの手紙　―　１２年後の原発災害　　関　礼子　編

紹介　石角敏明（長岡京市）

新泉社
１０００円(＋税)

「汚染水」の海洋投棄が問題になっていますが、「原発事故」で避難を余儀なくされた福島県民、あるいは「したくても出来なかった」県民の、今の声・当時の様子を１７人の人が語っている。

ここには「原発事故」の恐ろしさが語られていると紹介すれば、それで終わりかもしれないが、一人一人の証言を読めば、まだまだ「福島の復興・再生」という言葉を使うことが本当に良いのかと思ってしまう。「１２年」といえば、干支が一回りした年月だが、本当に福島は復興したのでしょうか？

「帰りたくても帰れない故郷」「伝統芸能をいかに次の世代に継承していくのか」避難した人たちの思い、そして避難したくても出来なくて「子どもの健康の甲状腺検査の結果に一喜一憂する親」「子どもを被ばくさせたことを詫びる親」等、ここには「このような災害を二度と起こしてはならない」という願いが込められている。一人一人の文書は短いが、熱い願いがこもった内容である。

■３・１１大津波の対策を邪魔した男たち　　島崎邦彦　著

紹介　石角敏明（長岡京市）

青志社
１４００円(＋税)

原発事故が起こった時、「想定外」という言葉がよく使われ、「保安院」と電力会社のなれ合いが批判された、しかし、地震対策・大津波地震対策を取ることは本当に不可能だったのか、本当の原因は何なのかを告発している。例えば、東京電力は津波対策は土木学会の「津波評価技術」を基本にしていたというが、その前に政府の地震本部長期評価部会で、「大津波はどこで発生するか」ということが報告されている。著者は部会長として大地震・大津波の発生を警告していたが、それがいかに公表を妨げられたか、電力会社、あるいは行政組織によって無視されたかを関係者の実名をあげて詳細に記されている。「今さら何を」と言われる方がおいでになるかもしれないが、国民を納得させるための科学的な発表、説明のためにいかに学術団体や研究者が取り込まれていったか実態が暴かれている。実名で告発された先生の弁を聞きたいが・・・・・・。もしまだこのようなことが行われているとしたら、汚染水の海洋投棄、本当に安全なのでしょうか。今はそのようなことは行っていない、と信じたいが、この書籍を読めば、東京電力、政府の発表は信じられなくなる。

■【増補版】軍都廣島　　清水章宏・橋本和正　著

紹介　平　信行（南区）

一粒の麦社ブックレット
900 円(税込み)

この本は２０１１年発行の初版本に、その後の研究成果や発見が追加されて、２０２２年に新たに増補版として発行されたものです。

広島は日本を代表する象徴的な平和都市として語られ、多くの人々に紹介され、訪問もされています。世界でヒロシマの存在を知らない人はそう多くはないでしょう。人類史上初の、そして長崎と共に唯一の、実戦による核兵器被害を受けた街として、その痕跡と実相はますます正確に遺され、伝えられていくことが求められています。

同時に、広島の街が、日本がかってアジアの国々を侵略する拠点、出撃基地として極めて重要な役割を果たしてきたことも、あらためて認識する必要があります。本書はそのことを理解していくための導入書になると思います。

日本の本格的なアジア侵略は１８６４年（明治２７年）の日清戦争から始まりました。日清戦争の舞台は朝鮮半島で、戦地に最も近い出撃拠点の条件に適う都市として廣島が選ばれました。当時山陽本線が廣島まで開通しており、兵員と軍事物資が廣島まで鉄道、廣島から海路輸送されることになり、そのことが後の軍都廣島を発展させるきっかけとなりました。

日清戦争中２年間大本営が廣島に設置されました。廣島の宇品港は日本陸軍出撃の一大兵站基地として、関連産業ともに拡大発展していきました。復員する兵士の検疫所、陸軍病院など健康管理対策も整備されていきました。日本の侵略戦争を支えたのは廣島の街だったといっても過言ではありません。そのことを表す具体的な事実の数々が本書で紹介されていきます。

１８７３年（明治６年）明治政府は日本全国に６つの軍隊編成を行い、広島には後の第５師団が設置され、第５師団には広島召集の郷土部隊歩兵第１１連隊が配置されました。第１１連隊の明治から１９４５年終戦までの戦歴が叙述されています。その中で重大な事実、事件が明らかにされています。１９４２年のシンガポールでの華僑虐殺事件と、マレーシアでの住民大虐殺事件です。シンガポールやマレーシアを占領していくに際して、日本軍は現地での抵抗勢力を排除しようとします。とられた手段が全住民の虐殺、ジェノサイドです。

本書の後半は、この第１１連隊の虐殺事件を中心に、アジアにおける日本軍の侵略の実態を明らかにしています。著者の橋本和正氏の叔父さんにあたる人が虐殺事件を行った責任将校の一人だったということも明らかにされ、著者の贖罪の気持ちと行為も含めた記述となっています。それだけに読む者を圧倒する内容なのです。

ヒロシマを語る時、被害の実相だけではなく、加害の歴史と真実も語られなければならない。そうでないと、人々の心に落ちる本当の訴えにはならないでしょう。ヒロシマは、あまりにも加害の歴史について知らなさすぎる、語らなさすぎる、と思います。

Scrap book

■核実験被害に補償を　米ニューメキシコ州　市民が宣伝
「トリニティ実験は土地・水・生き物を汚染した」

米南西部ニューメキシコ州アラモゴード近郊にある米軍のホワイトサンズ・ミサイル実験場の入口で２１日、核兵器間全面廃絶と７８年前に同地で実施された人類初の核実験「トリニティ実験の被害を受けた周辺住民への補償を求めて市民が宣伝しました。

同実験場内には１９４５年７月に秘密裏に行われたトリニティ核実験の跡地があり、春と秋の年２回、一般公開されています。トリニティ核実験の補償を求める団体「トゥラロサ盆地風下住民共同体（ＴＢＤＣ）」が毎年、公開日に合わせて宣伝しています。

宣伝に集まった人たちは「すべての核実験被害者に補償を」「核兵器廃絶を」「トリニティ核実験は土地、水、生き物を汚染した」などと書いたプラカードを掲げて、核実験跡地に向かう人々にアピールしました。

実験場の東方にある町カリゾゾ近くに住むキャロル・ネイガンさん（７９）は「大学時代の日本人の友人は親が広島で被爆したと話していた」と振り返ります。「米国政府は核兵器禁止条約に参加し、核実験被害者にまともな補償をしてほしい」と話していました。

米政府は、１９９０年度の連邦議会が可決した「放射線被ばく補償法」に基づいて西部ネバダ州の核実験場の周辺住民などに補償を行ってきました。同法はトリニティ核実験の周辺住民については資金不足を理由に補償の対象外としてきました。

しかし米上院は今年、住民の要求を受けて対象を拡大することを盛り込んだ法案を賛成多数で可決。ＴＢＤＣは、下院と協議して法案を成立させるよう議会に訴えています。

トリニティ核実験場の跡地に向かう人々に核兵器廃絶と周辺住民への補償拡大を訴えて宣伝する人たち＝２１日、ホワイトサンズ・ミサイル実験場入口

■兵庫・平和首長会議国内総会閉幕　市民レベルで平和創造を
核禁条約署名・批准　要請文を採択

兵庫県姫路市で開催された「平和首長会議」の第１１回国内加盟都市会議総会は１９日、日本政府に対し１１月の核兵器禁止条約第２回締約国会議へのオブザーバー参加や、条約の署名・批准を求める要請文を採択して閉幕した。

総会では加盟都市が平和に関する取り組みを報告。鈴木史朗・長崎市長が「市民に一番近い基礎自治体が声を上げ、次世代へ戦争や被爆体験を継承し、平和文化を広め根付

かせていくことが極めて重要だ」と訴えた。

総会後の記者会見で、松井一実・広島市長は武力衝突が起こっている国際情勢について触れ、「市民レベルで、そして世界と連携して、平和につながる文化の振興を行っていくことの重要性を改めて認識できる機会だった」と強調した。

総会後の記者会見で会議の意義や成果について語る鈴木史朗・長崎市長（右端）ら＝兵庫県姫路市で

長崎市の鈴木市長は「平和の必要性を訴える市民の力をつくっていくための平和首長会議の枠組みは、より重要になってきている」と述べた。清元秀泰・姫路市長は「原爆症第１号患者」を診た医学者の都築正男博士（故人）が姫路市出身であることを紹介し「今も多くの地域で核関連の後遺症に悩んでいる人がいることも踏まえて発信していきたい」と語った。

次回は２０２５年１月に東京都武蔵野市で開催される。

（２０２３年１０月２０日　毎日新聞）

編集後記

▼ウクライナ戦争の行方が依然として不透明な状況が続いている最中、１０月７日、今度はイスラエルとパレススナ・ガザ地区ハマスとの間で戦争が勃発しました。すでに両側あわせて１万人近い犠牲者が生まれています。今世界各国で“ハマスもイスラエルも戦闘止めろ!”“イスラエルはガザの封鎖を止めろ!”“パレスチナに連帯を！”の声が巻き起こっています。▼１８日、国連安全保障理事会でガザの戦闘中断を求める決議案が提案されましたが否決されてしまいました。なんとアメリカが拒否権を行使したのです。「自衛」の名のもとにガザ侵攻を企てるイスラエル。そのことを正面切って否定も非難もできない（しない）今のアメリカ政権、指導層。パレスチナ vs イスラエルに止まらない、アラブの世界 vs アメリカにも発展しかねない、２００１年９・１１の再現にも結び付きかねない緊張感を持ってニュースを受け止めました。しかし、アメリカの人々も２２年前とは違う、多様です。アメリカ国内からも“イスラエルはガザの封鎖を止めろ!”“パレスチナに連帯を！”の声が沸き起こる事を願っています。（平）

２０２３年１１月（霜月・しもつき）行事カレンダー

月	日	曜	行　　事
１１	１	水	被爆二世健康診断開始（京都府）
	２	木	
	３	金	11・3 憲法集会 in 京都 文化の日　キンカン行動
	４	土	
	５	日	
	６	月	６・９行動
	７	火	第３次「核禁署名」共同提出のつどい（14：30・衆院第一議員会館）
	８	水	
	９	木	６・９行動
	１０	金	キンカン行動
	１１	土	日本被団協近畿ブロック相談事業講習会（10：30・神戸市立婦人会館） 日本平和大会１日目（鹿児島市） *世界平和記念日（第一次世界大戦終結）*
	１２	日	日本平和大会２日目（鹿児島市） 米軍基地はいらんちゃフェスタ２０２３（13：３０・丹後文化会館）
	１３	月	
	１４	火	京都「被爆二世・三世の会」例会（18：30・ラボール京都）
	１５	水	七五三
	１６	木	
	１７	金	キンカン行動
	１８	土	
	１９	日	安保法制廃止をめざす 19 日行動（16：30・市役所前）
	２０	月	世界の子どもの日（「子どもの権利条約」採択 1989 年）
	２１	火	広島「黒い雨」第２次訴訟第２回口頭弁論（広島地裁）
	２２	水	
	２３	木	勤労感謝の日
	２４	金	キンカン行動
	２５	土	
	２６	日	
	２７	月	核兵器禁止条約第２回締約国会議開幕　→　12 月１日まで（N・Y）
	２８	火	
	２９	水	
	３０	木	